

本朝画法大伝

和漢画祖伝記

画に和漢の別あり、古は 本朝に名手多し、中ニも百済河成巨勢金岡藤原信実土佐家、和之祖、和画ノ達人なり、しかるに人皇百一代後小松院ノ御宇、応永年中に異国より如雪乱芳軒と云僧来りて、漢画を描エカきて名を当時に播ホドこす、爰に狩野祐清正信元信か父といふ者あり、如雪を師として漢画を学べり、又其後周文と云春育とも云唐僧来り、相国寺に住し漢画をよくす、雲谷寺之座主雪舟備中国赤濱之満溪斎とも米元山主ともいふ、後花園院寛正年中大明に入、四明天台に人也姓ハ山田也登り第一座主と成、帰都之後周防国山口雲谷寺に住す、仍て雲谷と云を師とし漢画を学ぶ、此時正信も同じく周文に教を受たり、雪舟・正信同門たるを以て兩人之筆勢周文に髣ホウ髴フツたり、又藤原信実か末裔に土佐将監光信と云者、天性和画に工にして遠祖信実にも恥ず和画之第一と称せらる時に正信か子光信後古法眼といふ土佐光信か女を娶メトりて縁家の好を結び、且光信に和絵の法を受たり、此時諸国乱れて軍戦しばく打続世間おだやかならず、光信は難を紀州にさけ、或は泉州和州に身をひそめて太平之時を俟けり、雪舟は筑前に下り蘆屋アシに寓居して釜の絵を書て給食す、後又大明国に渡り張有聲を師として画の草を習得て 本朝に帰ル、是本朝草画のはしめなり、是より前は皆真画のミにして草なし、此雪舟を漢画師といふ、又元信は本朝に産れて何ぞ異国の風骨を事とせんやといふて漢画を物の数ともせず、専 本朝の風格を建とす、是に於て和漢の両品を別てり、雪舟を漢画師と名付ケ、元信を 本朝の画師と称する心を以て本画師と称せり、是によりて自然と狩野氏の流儀を総名に本画と呼来れり、曾て明国の鄞城鄭沢キンジャウアイタクといふ者元信に書を贈りて亶マコトに狩野氏ハ画家の徴証也といへり、又土佐光信は曾て累世和画の名家なれば漢画に心を寄せず漢物を描エカず草画を描ず、唯真画のミ益事とせり、仍而

和画師と呼来れり、以上合せて三画師と云雪舟・元信・
光信三家也土佐ハ天性器用の勝れたる者なり、

元信は修行シ勝れたる者也とぞ案するに狩野元
信我意をたて

漢画に事とせず 本朝之風格を立といへども、元来雪舟・正信
兩人ともに周文に漢画を学びしより、元信もおのづから漢画の
筆勢あり、況や草画を雪舟より伝受、事なれば漢画にあらずして
なんぞ和の風格のミといはんや、又土佐・光信に和画の法を学ふ
により和漢混雜して其筆勢和にあらず漢にあらず自成一

家者といふべし、又土佐家にハ多くは和の人倫を描を

宗として草木蒼鳥を事とせず、俚に禽獸を画たるも皆和の禽獸
也、すべて人倫草木蒼鳥に至るまで精密をつとむ、依而草画
を描事多くハなし、其精密に至
ては狩野家は流の及所にあらず

浪華画師後素軒識

本朝画法大伝

土佐正六位上左近将監藤光起撰

○六法

○一日、氣運生動

氣運とハまつ描^{エカ}かんと思時、我心氣を身体に運^{メグラ}し充^{ミタ}しむる事なり、心小さく氣充ざる時ハ筆法倅^{カシ}け衰へ常に不足す、憂^{カナシム}哀時ハ筆勢弱く柔に怒る時ハ筆麁^{アラ}く剛く、喜時ハ筆軟^{ヤハラカ}に弛^{ユルム}かながゆへに喜怒哀樂も其正しきを得を要とす、唯平氣にして臆したる心もなく澆^{ヘビ}たる心もなく、氣を身体に充滿して天地に亘る心にして、何心なく書出すを云なり、生動とハたとへハ鬼神人物よりして禽獸草木に至るまで皆それ〳〵に靈氣を含みさながら目前に其物を見るか如く、將士ハ武威をかゝやかし、宮女ハ艷色の姿を現ハし、僧侶は方便の顔を現し、鳥に飛鳴の勢あり、獸に吠走の形あり、松柏は霜雪を凌ぎ怪節枯形あり、龍虎ハ風雲の氣を含み天地を動すの勢あり、春花ハ發生之氣をふくみて温順の容あり、夏木ハ深緑をなして茂長の勢あり、秋草ハ乾枯の氣を催し蕭殺の姿あり、冬花ハ雪霜を帶寒蔵の色あるか如くそれ〳〵に靈氣を失ハざるを画法の大伝第一とする所也、まして人倫画像を第一の秘事とす、皆それ〳〵の靈氣うつり、されば神具はらす、神具はらされハ祭る所是空位、其精神を移入る事は麁工之及所にあらされとも初よりかく工夫をなして修行セすんバナソ画法之妙所に至る事を得ん、他物も亦しかり、唯に其物々の形を画かゝんハなんぞ伝授に及べき、画法は其精神靈氣を写入るを法の極意と定るなり、すべて人倫より鳥獸蟲魚に至るまで生ある者の精神を写入るといふは只眼睛の一点にあり、顔色容貌整といへとも晴の一点死する時ハなんぞ靈氣の具はるへき慎しむへきの至りなり

○二日、骨力用法

骨力とは筆の持様の事也、画に精神の入るといふハ皆指骨の力にあり、故に骨力と云、堅からず弱からず、指先にていかにも軽くいかにもつよく挟ミたる心をよしとす、堅く持時ハ筆はたらかす遅渋す、弱き時は勢なし、強直に温和に気高く潤ひて光沢あるハ是指頭之妙也、骨力之事ハ言語文字を以て述べき所にあらず、是を手にて得て是を心に応ずるもの也、画ハ第一質画の墨描を以て工拙を弁するもの也、彩色画ハ画之具にて紛るゝ事もあれども、墨描悪ければ其拙所ハ画具にてはおほひかたし、第二には古者より今に至るまで名人の法を立置たる様々の筆格をわかつて混雜なき様に心を細に付へし、又ハ真行草の三格を分別し大中小の三品の筆法を能々心を付けて書へし、是を用法といふ、筆法の悪といふは弱く重く賤しく平にして圓マロムなく滞り多を禁也、其所に至ては言語に展かたき味甚多し

○三日、応レ物写レ形

千体万形皆それ〱物毎相応する様に描事也、たとへハ帝王ハ位尊く儒賢ハ忠恕の心をあらハしふくミ、樹は硬く草ハ柔に春景は温潤を含ミ、秋景ハ寂寥の容あるか如く相応に描くを云、又絹紙の大小長短によつて相応にかくへし、楕物に平もの直なるものに長たくひ、是相応せさゆる也

○四日、随レ類賦レ彩

其品物の類に随て似合たる画具を用ゆる事也、たとへハ青に品々あり、其相応にしたかふて紺青緑青白緑アイラウ澱蒼緑を用ゆへし、赤に品々あり、其品に随て朱を用、丹を用るか如く、又ハ質絵の真行草に依て画具の濃淡浅深浮沈ある事をいふなり

○五日、経営置_レ位

模様をはかりて質画を出す事也と、此絹此紙にハ人倫をいかほとに画形ハかくの如くにすへしと思案をめぐらし、又屏風ならは花鳥を描かんにまつはしの一二枚め其画のうしろに成所にハ大樹をかき、其下には岩を書、間々にハ篠などを書いてべる様にし、其後にハ山を書て気の脱ぬやうにし、大樹の梢は地引して取消し、木陰にハ谷か川なとをあいしらい、三四枚めにハ梢を下り枝に、其下の野地にハ大鳥などを書、小鳥なと所々に見合同し事のなき様に配り模様を引たつる様にし、五六枚めには水など書、水草少々取合せ上にハ遠山浮雲などをあ_いしらい格好に書んと目算するか経営也、描列か置位也、すへて画ハ大小共に真中に描を禁ふ、前をあげ後へよせて描へし、又婚礼などの屏風に忌ものあり、水札一羽描事、山雉雉子などのたくひ鶴などにも一羽書事をきらふ、秋景なども忌へし、産屋の画に雀兔燕などのたくひをきらふ、亀鶴松竹牡丹蓮花などの類何方ニも碍事なし、是等も其相応を見合せ描か経営置位也

○六日、伝_{タテマ}模写

師匠たる人より画本を借りて膠地紙に伝写し是を貯置第一之宝とす、是を粉木といふ、臨にするはあしく、臨にすれハ筆勢不調、唯其形を似せたるはかりにて用にたゞず、写に心付有へし、画本に不似して宜あり、不似して悪あり、似て宜あり、似て不宜あり、其画を学ふには粉木を写を第一とす、粉本を持されは習事あたはす、目利もならず、粉木を写間にしぜんとそれ_レの筆格彩色も覚るなり

○三品

○神品

則氣運生動也、出於天性
人莫窺其巧者謂是神品

妙品

筆墨優絶伝
染得宜意趣

有余者曰之、妙品術をよく熟し格式を超、法をはなれて描といへとも、法をやふる事なし、是則画意不画形者なり、

○能品

其形似たるを得て規矩を失ハざるを能品といふ、よく法を守りて格式を覚たる也、俗に是を巧者といふ、この能品ハ修行して至るへし神品妙品ハ麁工の至りかたき所なり

○十二忌

一、置迫密^{チハクミ}

二、遠近不^レ分

三、山無^ニ氣脈^{ミヤク}一

四、水無^ニ源流^一

五、境無^ニ彝險^{キケン}一

六、路無^ニ出入^一

七、石只一面

九、人物僵^{クラ}儻

十、樓閣雜亂

十一、滷淡失^{フク}レ宜

十二、点染無^レ法

右六法三品、十二忌ハ唐画史に本づく画家之先務也、ユルヤカ忽にすべからず

○製作楷模

夫画の道は言語文字を以て得べきにあらず、黙して心通するにあり、其黙して知者は皆是を言語に得、其言語より得る者は或ハ知り或ハしらず、一ハ精一疎なり、故に博とせず、博学て約にする者ハ皆これを文字に得、書に依て博識り、言語を聞て精し黙して知て神に至る、神靈備る者は画工の妙也、それ帝王ハ天日龍鳳の表を崇くし、儒賢は忠信礼義の風を顕ハし、武将は勇敢英雄の容を多くし、貴威ハ侈靡の姿を尚び、隱逸ハ高世の節を識し、仕女は艷顔窈体を顕し、釈像は善巧方便の顔あり、道流は修真度世の範を具し、外夷は華をしたひ欽順之情あり、鬼神ハ醜^{シウシヤチサイ}・馳^チ雄^{ユウ}の状に宜く田家^{ジユンハク}に醇朴の真あり、

畜獸は筋力精神毛骨隱起を備禽鳥は毛羽翔り拳り飛集の形を尚ひ、龍魚は游泳の妙昇降の勢あり、水ハ湯々として動が如く、山ハ隱々として靜に木に幹枝茂長を尚ひ、草ハ莖葉嫩柔^{ドンジウ}あり、四時之氣候あり、陰陽之向背あり、老嫩^{ドン}の先後あり、屋宇ハ折算^{カズ}欠る事なし、田野咸土^{カン}の景候に皆それ〳〵に筆力の齊整^{セイイク}なるを画法之楷模とはいふなり

○山水総論

大凡山水を描に意筆頭に在り、丈山尺樹寸馬豆人是其大法也、遠人鼻目なく遠樹枝條なく遠山皴^{シハ}なく隱々として眉の如く、遠水波なく高事雲と齊し是其訳也、山腰ハ雲塞り、石壁ハ泉塞り^{フナガ}、樓閣は樹塞り、道路ハ人塞り、石ハ三面を見ず、是其訳也、山水を描に峭尖^{タカクスルト}なるものハ峯、平夷なるものハ嶺、峭壁^{ソバダツ}ものハ崖^{キリキン}、穴あるものは岫^{ヤマダキ}、石にかゝるものハ岩、形円なる物ハ巒^{ムネ}、両山路をはさむものハ壑^{タニ}、両山水を夾ものハ澗^{タニガハ}、水川に注ぐものハ溪^{タホタニ}、泉通ずるものハ谷^{コタニ}、路下の土山ハ坡^{ツ、ミ}、目を極めて平夷なるものハ坂、もしよく弁別セハ山水の彷彿たる事を知り、それを觀るに先氣象を見、後二清濁を弁へ、賓主の朝揖を分つ、群嶺の威儀を列ぬ、多ければ乱、少ければ慢、多からず少からず、遠近を知らんと要セハ遠山ハ近水に連る事を得ず、山腰ハ寺を回抱し安すべきを見よ、断岸乱堤にハ小橋を置へし、路ある所には行人あり、道なき所には林木あり、崖の古木ハ根を露して蔓纏、流に臨石岸ハ巖空にして水痕苔蘚あり、凡林木を画にハ遠は疎平に近ハ高密也、葉有ものハ枝軟に、葉なきものハ枝硬く、松皮ハ魚鱗に似、栢膚ハ身に纏、土に生ずるものハ脩長にして正直、石に生ずるものハ拳曲にして伶介、古木ハ節多くして半死^{カル}、寒林は扶疎にして蕭森たり、凡山水を描にまつ四時を按すへし、春景ハ霧消烟簾、樹木隱々として遠水に藍を揉^{モミ}、山ハ堆^{ウツタカク}青に宜しく、夏景は林木天に蔽^{フホ}ひ、綠蕪平坂雲をうかつ瀑布水^{ハクフ}に近き幽亭^{ユウ}あり、秋景は水天一色す、簇々たる疎林鴈烟

空に横はり、蘆沙汀に裊ヲル、冬景は平地を雪トなし、老樵薪を負、漁舟岸に傍ソヒ、水浅く沙平にして凍雲黯淡たり、酒旗孤村あり、風雨ハ天地を分たす、東西を弁かたし、行人の傘笠漁舟の蓑笠父あり、風有て雨なくはたゞ樹枝の斜なるを看よ、雨有て風なくは枝葉下り垂ル雨霽時は雲収り天碧にして薄霏凝コリ、山光緑を添、漁父網を斜陽に干す、暮景ハ山落日を啣ミ帆を江濱に卸す、人行急にして半柴扉を扃す、或烟斜に霧横はり、或雲遠岫に帰り、或ハ秋江を晩に渡り、古塚断碑筆法布置す、更に岐に臨事を見よす、山形は犯重事を得す、樹頭ハ整齐を得され若意を爰に留る者ハすべからく心に玄微不測之神妙を会すへし

○画論秘訣

夫画の要ハ輕の一字に止のミ、たとへバ真の極彩色也とも輕の意を忘べからす○絵は質朴シツハクなるがよし是ハそのまゝにて繕事なかれと云事也、繕へば蟠ワダカマりて見ぐるしく氣去て死す ○墨色ハ潤かよし、潤ハ自然の妙也、但口伝あり、描たる跡を扱ことなかれ、扱へハ辭りてあしゝ、又深墨も浅墨も筆に多く含せて渴さる様に墨をもたせて書心得あれハ光沢ありてよし、是則輕之義也、飛白渴筆ハ所によるへし○骨法フデユキは直なるを以よしとす、只滯処なく筆を浮ならす沈ならず、何の意もなくさり／＼と書へし、兎角大様に書かよし、筆勢を顕したくおもひ屹屈ギク々と利ハ小出来過て見くるし、しかれとも筆勢ハ強かよし、弱ければ往へき所まで往至かず、揮て精神備ハらす、不膠毛辺紙フクサドウシなどに画には別て口伝多し、不膠毛辺紙に荷葉ハスノハなどのごとく座広バものをかくにハ指頭にて紙を摺皺ツカミンハらせて書へし、唯に描時は滑スラリとして氣脱て悪し○草木を描に枝葉花共になくて叶さる所にはかり書べし、それも少しはたらぬくらいをよしとす、無用の枝葉あるは賤し、人倫の衣紋皺なども文理すくなきかよし、何にても十分に残さす書をきらふ、事少

なにして意一はいなるをよしとす、下工の画たるは意いたらさるゆへ十分に書ても却て足らぬやうに見ゆ、良工書たるは事少なにて意十分に余る○草木の葉花などに四花四葉を禁と云ハ世俗の諺也、画家に其論なし、しかれとも又俗習に随て陽数にすべし○筆法は異風を好へからず、或ハ切へき所を不切続へき所を切か如き、微塵スロシの所にて巧拙見ゆる也、大なる所は氣の付安きものなれとも細なる所にハ疎略多し、古工の描たるをよくく見へし○総て物の状を描によく生に似てあしきあり、生に不似してあしき有、生に似て良とは常の法也、生に不背してよきとは是則画の法也、伝授口決爰に在、唯筆勢と墨色とに子細あるのミ、凡画を学にまつ物の状をならひ、次に骨法を習ひ、次に心を覚る、爰に至りては言語に述かたき味甚多し○総て画を書に墨画はかりによらず極彩色なりとも大方あつさりと書へし、模様調ハさるかよし、添物も三分一ほと書たるかよし、詩歌の心をかくとも成出すへからず、おもひ入を含すへし、白紙ももやうの内なれハ心にてふさくへし、異国の画ハ文の如く 本朝の画ハ詩の如し、画ハ詩のかたち、詩ハ画の意ともいへり、和画に屋根を不画して座席を顯すも是土佐光信が巧にして漢画の及はさる所也、唐人も感じけると也、是不似して良と云ものなり、所謂変也奇也權也草也ハチ花也、漢画ハ正也經也真也実也、其真実なるに至ては 本朝古名画師といへとも漢画にハ及ばざる所あり

○彩色

彩色ハ浅きウスを佳とす、是則輕也、極彩色にても此心ハ不離ヘナレ、初学の者の彩色ハ書口より必深、彩色深ければ重く賤しくして死す、地画死しても彩色にて活事あり、下工も老功なるは地画死ても彩色光沢ツヤあらはれて上工の書たるに彷彿マギレ事有、又器用人に超たりとても初心の者は質画の筆勢よく書出しても彩色にて死事あり、是輕の心を不知ゆへなり、

大概其意を覚ても機に応するか為悪もの也、彩色機に臨変に応すへし、機とは地画の真行草を云、真の真、真の行、真の草、行の真、行の行、行の草、草の真、草の行、草の草など云事あり、大旨描口より少し浅きハよし、深ハいやし、古書を見るに皆浅を旨とす、ヤツス省といふか肝要也、すへて画の味といふはあまり堅実過たるも良からず、又乱雑なるも道に非ず、中道にして浮沈を見合せ、さらりと俗のはなれたるかより、余り美しけれハよハし、とかく過不及なきがよし、コツクリ朴とすねたるかよし○彩色ハ右に云如く彩色にて書彷彿マギラカす事も有とも、墨画ハ繕のならぬものなり、墨にてハ善惡忽顯る、仍て草画の墨画を大切とす○彩色に筆を用る事往て還るへからず、是ハ染出して又染たる跡をつくらふ事なかれといふ事也、染て後黒キタナクなるゆへ固く禁す、筆に具を多く含せてさらりくカハキとさきかけくして跡のすれさる様に、又水溜ぬ様に中に浮心持にて染へし、摺てハ干て光沢なく文理あしく水たまれハ緑過ドリて潜焉ゆへあしく、是に秘術あり、紙につよく当るなかれ、筆の毛頭サキの紙に当らぬ様にはく心持よしとす、すへて紺緑の類別てぬりかタし○金、朱、藍の三色ハ墨に通用す故に古き画山水人物を墨一色を深淺にて画に加へ用ゆ、墨画の真行にハ多くハ金朱を交用る事有、金ハ色の主也、万色に加へ用ゆ、金泥かすり、人物の衣紋、木の節、すへて日表の光り、又ハ名付かたき色、鳥獸の毛描、山水屋宇続あしき所ハ金にて書切なり、胡粉草汁を用れハ彩色也、是薄彩色なり、黄土も同じ、此時ハ生臙脂等も用ゆる也、是極彩色の上仕立也、右の具に胡粉を合せ彩色するを中彩色と云、是よりハ紺緑白も加へ用ゆ○大青コシヤウ、浅青ダンヤウ、緑青、白緑青を大画具と云、是を用ゆれハ極彩色の草也、是に二泥デイを交へ用ゆれハ極彩色なり、真の極彩色ホノマをハ地を皆胡粉にて置、上にする也○極彩色にても地画ハ浅墨を用ゆ、胡粉の地画ハ別て浅かし、朱紺緑浅の地画ハ深墨を用ゆへし○雪舟か画に下草などを板にて押たるあり、当流には不用

○地引法

墨の地引ハ墨を薄くして二三篇引へし、如此すれば和かにほつこりとしてよし、永真脚には一篇引とぞ、画に地引すれハ厚ミ出てよくべ、深けれハいやし、浅過ればしまらず見合肝要也、行草の画にはむらくに穴ある様に取けし繕はぬがよし、纏綯の心にすへし、又草汁シユルにても引事あり、金泥にて引を泥といふ、此時ハ墨の地引ハせぬ事也

○付立

地面なしに画具にて直に描を云、是草の真也

○隈クマ 曲の書も用へし

一方取消する也、水付る筆を曲筆といふ、此時ハ筆二本も三本も持也

刷子曲ハケクマハ地引と同じ、あまりに鮮なるハあしゝ、二三篇取消へし、又いろふ事多けれハ賤し、画の善悪ハ曲と地引にてあらはるゝ也

○彫塗

地面の墨書を生て間々彩色する也、紺緑朱など塗時必あり、口伝重々

○殺塗 没塗とも書へし

地面の墨書を不生して一面に彩色する也、胡粉及水画具等に塗に用ゆ、口伝書重々

○退塗 退曲といふ事もあり

墨書の除より少し退てぬる事也、胡粉にハ必用

○括^{クハル}端^{フチヲ} 括曲といふ事もあり

凡地塗して端を括事ハ多くは同色を用、陰の卑処を括也、又胡粉の話は陽の高処也、不残括ハ賤し、深处を括り浅処を残すへし、朱丹肉色臙具黄土藤黄具褐、此類は生臙脂にて括、又褐と黄とは褐にても括、浅黄澱にて括、緑青ハ蒼緑或白緑にて紺青は群青にて、臙脂蒼緑胡粉は同色にて括へし

○縋^{ダミ}綯^{ダミ}彩

同色の画具にて次第^{ホノママ}に深める事也、和の官女の袖口及壁代など或鎧の下濃等皆うんけんにする也、たとへば朱縋綯の時ハ先胡粉ぬり曲とり消し、次に肉色又濃肉色、次に丹、次に朱と如此ぬる也、何色にても是に准し知へし

○粉本紙

美濃紙に膠地して未干^{ナマビ}の内に重ねきりくと堅く巻、二三度も巻返し置ハ皴伸也、是を粉本といふ

○念紙 面紙とも云

杉原紙を柔に揉、皴^{クズミ}をのし浮灰を細抹し、酒ニ而ねり、右之紙に付ケ用ゆる也

○焚筆

画史に朽筆と云ハ是か、臭楨^{クサ}か桧木を用へし、焚頃口伝

○裏焚筆

本紙の裏より焚筆あて写紙に重ね、羽箒にて掃てうつすへし

○藁筆

藁を寒中米汨シロミスに浸し、寒あけて取出し、塩水に白砂糖を加へ、それにて煮、柶槌ヒシキにて打碎、管人之所を籜ヒシキにて包用ゆ、岩樹荷葉等に妙也

○墨

異朝之製其色賤しからず、和製は光沢過て柔也、又枯過たるはあしゝ

○硯

柴石青石よし、和名は長門の赤間、若狭之宮河を上とす

○紙

毛辺紙は官紙を上品とす、舐ネアリ見るに舌をとらざるものよし、白色なるに上下あり、浅黄なるは中品也

○筆 刷子

筆は面相毛描、下画、彩色、大小、竹葉描、隈筆、定規筆等也、右各墨と彩色と二通にすへし、刷子ハ二分三分五六寸にいたるへし

面相毛画ハ猫毛にて製すへし、すへてつよきかよし、
此外箔簪、竹刀、箔篩、振毛等もあるへし

○磬水 ダウス

スキニカワ
十錢製
法別伝
黄明膠

明磬

冬ハ五錢
夏ハ四錢

水

一升

先水三合ほと熱湯とし、膠をとろかし、手を留めすかき

まハし、能とろけたる時明磬を入沫の消まで煮へし、扨後に水七合を入、図絵にハ春夏共に膠多きかよし、右水一升にて唐紙ハ廿枚、美濃紙は百枚にあまる也

○朱印色

艾をよく揉、寒中米泔シロミズに浸し晒し日に干、又揉、水にて煮、真白になして水飛、朱を交、

清蠟油チンにて煉へし、又胭脂エンジを入たるもよしと也 カタヘニ

○花押法

画の釣合に成てはゆる也、画の後に押へし、先紙に息を吹かけ押ハよくうつる也、しかれとも付過たるも賤し、霜降にはらくと目のあきたるかよし



右ノ鳥ヲ主トセハ

鳥ヲ主トセハ

左ノ木ヲ主トセハ

竹ヲ主トセハ

木ヲ主トセハ



木鳥共ニ右ニ出

鳥を主トセハ

木鳥共に左出

木鳥共ニ左出

雄ヲ主トす

木ヲ主トす

下ヲ主トす



真中 下の鳥ヲ主トセハ



上ノ木ヲ主トセハ

画に前後賓主あり、其主とするものハ後に印を押へし、気形に草木ハ
 気形を主とすれども時によるへし、上下にある画ハ下を主とすれども
 それも時によるへし、前後見分ケかたく候へは、真向なるものハ右に
 押へし、此図を按して他も推知へし

二、押時氏実名ハ上、号字ハ下、堂菴軒齊ハ上に押事も多し、高下ハ人によるへし

○板に描法 画馬又ハ額などに描時の事也

まつ礬水を引浅黄土具をぬりて後、人形などは大胡粉をぬり、墨にて又描起也

○絹に描法 是ハ画絹之事也、紗綾縮緬などハ又別伝あり

簞に張付膠地をして地塗は皆裏より殺塗也、仕立は常の如し、表より彩色すへし

○不地紙
フクサカミ

墨画にても薄彩色にても潜焉をいろふへからず、いろへハ重くして賤し潜焉て却て面白き事あり

○菖蒲旗額ノボリ

のぼりと画馬額ハ明間なく一はいに書へし、人倫を画くにのぼりにハ面具を塗に及ばず、合黄土にて曲朱墨括也手足、鎧武者袖草摺などを浅墨塗札も一筆ツ、書へし、藤黄シワウアイロウ澱等の水画具にて仕立也、粉画具膠の入たる者ハ多く用ゆべからず

○画具製法并染法極秘伝

○紺清コシ 浅青ダン 緑青ロク
又大青とも書 又白青共 群青共書 又石緑とも石青とも云、銅山より出る也画史曰紺青の内よりえらび取

白緑青緑青の内より取 已上之四具を大画具といふ

○緑青製法ハ先鉢に入水と膠を入、石乳木にて軽く少研て、上之濁水を別器に飛て底に貼アダメてドロと塚と成を一番緑又頭青とも云青といふ、又かの別器に飛たるをかくすり濁水を動離て又別器に入底に沈たるを二番緑青と云、又彼別器に飛たる水をよく沈せて底にたまりたるを白緑青といふ、又油子三、但研に口伝あり、強く久しく研ば皆白く成て不残白緑と成故、少し研ては水をはへ又水と膠と入て研てははへる也、如此する事七八度に過べからず、膠を入事は膠の粘にて二番を引出すため也、二番を入器は大なるがよし、小器にては水溢也、扱よく干て後に熱湯を入膠をはなし又干て貯置べし、緑青に善悪あり、青白にして黒色なく光あるを良とす、青黄にして黒色あるは下品也、日本には摂州多田の銀山より出るを上とす、石青の堅くして碎けがたきには耳垢を少入か油を少入べし、緑青を和には水と膠と入少すりてつかふへし、多くする時ハ色白く

なる也、水も膠も多く入、皿を側筆ソハタデを投してつかふへし

○同塗術、まづ白緑を以質画シタエをほり浅くぬり、次に二番をかけ又二番かけ、扱緑青ぬる、膠を濃多く入て筆頭にて交て塗へし、右は真の彩色の法也、行には下塗蒼緑クサノシルにてよし、緑青ぬりたる上へ他の具をぬるには鼻油を引へし、左なけれハ不付、草木之葉わり曲などの時の事也、又初めに草汁にてわり曲、次に緑青ぬるもよし、葉の半分過より取消なり、緑青紺青の曲は膠水にてくま取、清水にてハあしゝ

○二番緑 水と膠と人かろくすりてつかふ、細なる故衣紋等をかくにもよし

○白緑 水と膠と人かろくする、草木の裏葉茎クキに用

○大青コンジヤウ 石也、内より浅青グンを出す、製法緑青に同し、まつ粉中に指を入見るにそのまゝ指につくは真の紺青、付ざるは花紺青也、膠深コクして入少しすりて筆頭にてぬる、曲ハ膠水にて取、真の彩色にハ下ぬり浅黄ぬり也、行には直にぬる也

○浅青グン 白青なり俗に群青グンと書、大青の中より出、其色浅ウスし、依て浅青グンといふ、是ハ大青の括り又ハ衣裳をぬり或ハ章書モンに用、水と膠入かろくするへし

○花紺青ビイドロ 硝石ヤキヲ焚て作、依て硝石紺青と云、其色花やか也、依て花紺青ともいふ、水と膠と人かろくする也

○銀朱ギンシュ 汞ミヅカネを焚て作、其色品々也、鮮明なるを光明朱といふ、よく水飛してつかふ、水

と膠と入かろくすれハ上に黄水浮ふ、是を別器にはへて又水と膠と入かろくするへし、強くすれハ皆黄になる也、和漢朱之色同しからず、紅毛より出るを佳品とす、よく正し用へし、真の粉色次はまつ質絵を肉色にてほりぬり、次に丹の具、次に丹上塗朱三遍ほとぬるへし、行には下ぬり丹ノ上に朱ぬるへし

○朱黄色 ノキメ 朱ノ上に浮水也、人面の作上に用

○玄色 ザシ 朱と墨と合す、依て朱墨共いふか、又丹と墨と合たるもよし、又傍葛刺もよし、枯松葉松皮島の毛書等に用、別に膠を入へからず

○黄丹・光明丹 ワウ 水飛セさるを黄丹、水飛したるを光明丹といふ、水と膠と入かろくすりてつかふ

○胡粉 ゴフン 三種あり、白堊ハごふん是土也、胡粉ハ鉛を焚て作る、蛤粉ハ蛤を焚て作る、面胡粉と云上品とす、膠をうすく入よくすりてつかふ、ねりやう口伝

○傳粉 ヨフン 胡粉を又焚たる也、蛤粉にても可也、水と膠と入よくすりてつかふ

○黄土 よく水飛し水と膠と入、よくすりてつかふ

○紫土 シ 赤土也、只異国より来ものよし、又土朱と云もの有色よし、水と膠入よくすりてつかふ

○傍葛刺 ベン 俗に紅朱といふ、異園より来ルものよし、水と膠入よくすりてつかふ

○燕脂 エンジ 蛤粉を蘇木にて煮て作る者用べからず、異国より来者よし、但紫とも云、水と膠入よくすりてつかふ、又調脂 エンジ

鋼緑 銅に酢をぬりてとる、水飛しすう石緑に同し、つかひやう同前故爰に略す、又京緑青とも云

○朱砂 シユンヤ 辰砂也、箭頭の者可也、水飛し水と膠入かろくすりてつかふ

○雄黄 ヲウウ 水飛し水と膠と入すりて用、唐より来雞冠石と云もの可也、画にハ黄葉と人衣 クチハ

の章に用ゆ、但し金の上につくへからず、数月の後金色やけて変也

○赫石 シヤセキ 其質堅くして色麗なるものを佳とす、製法石緑に同し

○石黄 セキワウ 此種山水に用に堪たり、焚て細末し松皮紅葉に用ゆ、水と膠入すりてつかふ

○老紅色 朱と赫石と合す

○珊瑚抹 サンゴノマツ 唐画山水の中に一種紅色年を経て変セさるあり、鮮なる事旭日の如し、宣和内府に印色にも用ゆ、其色佳

○雲母 ウンモ 摺に水と膠と入用、白桜白菊の上に少付て光をます

○焚黄土 黄土を土器に入煨したる也、水と膠入すりてつかふ

○生臙脂 シヤウエンジ 一名綿臙脂と云、是を調脂と云ハ誤也、唐より来を上とす、則臙脂山ミヲトキリ草と云草の汁也ト、(ママ血カ) 血に入沸湯を(ママ)を灑、箸にてしほり日干す、火にて干へからず、焦也

○藤黄 フウ 管管黄といふを上とす、唐より来海藤樹を煎して作、皿に入水にてほとはしかふ、冬木など描に墨に交て描は蒼潤あり

○雌黄 シフウ 雄黄の内より出、藤黄に代用てよし

○干澱 カンデン
アイラク 又靛花とも書、藍汁を干たる也、帛に包ミ沸湯に漬、動さる様にして灰汁出ハ幾度も湯をかへ灰汁なき時にしほり日干貯置へし、又蝶青

○草緑 センル 又万宝全書に苦緑とも書、又蒼線共書、澱と藤黄と合せたる也、澱多を(ママ嫩カ) 嬾緑と云、藤黄多を老緑と云

○縹 ハナダ 又浅碧共浅葱共云、澱に胡粉を合

○合黄土 又作黄土と云又土朱縹とも云、藤黄と朱と合する

○青鳩色 ヤマハト 白緑に藤黄を交、膠少青褐共萌黄ともいふ

○金ヒ翅ハ鳥色 白緑に蒼緑加ふ、又一方に白緑に合黄土を入

○木賊色 緑青に藁黄藤を入

○紅色ベニ 先胡粉をぬり後に生臘脂をぬる

○合紫 澱と生ゑんしと合たる也

○紫藤色フザ 合紫に胡粉ヲ入

○痕色ウルミ 又褐色とも書、先生ゑんしぬり後に大青かくる

○赭黄色 藤黄に赫石を加

○蒼綠色 蒼緑に赫石を入、初霜の木葉に用ゆ

○肉色ニク 又面具共云、一名浅紅、朱と胡粉と藤黄合す、人膚の下ぬりに用ゆ、但壮年にハ粉と朱と多し、老年にハ藤黄をます、但老年にハ朱至て少し入へし、朱之下ぬりに朱を多入へし

○丹グノ具 丹と粉と合す、小児の皮膚に用、肉色のかろきもの也

○是より以下総て何の具と云は皆胡粉を入事也

○生臘脂グノ具 生ゑんしに粉を入、浅紫なり

○調脂ノ具 紫に粉ヲ入

○藤黄ノ具 ○黄土ノ具

○紫土ノ具 皆粉を入 ○墨ノ具 粉ヲ入、又灰色とも云、澱を加へて藍灰色と云

○木ノ具 白緑の具に墨少加ふ、木によりて丹のきめ又草汁を加ふ

○白緑ノ具 胡粉を加、白花の下ぬりに用ゆ

○褐チヤ 丹藤黄墨合す、又一方に玄色に粉合ぬり、上に藤黄を加へると云

○肉色褐 肉紅共云、浅葱に生ゑんし少加

○藤黄ノ具褐 藤黄の具に墨と丹を入

○黄土褐 黄土に澱と朱と合す

○黄土具褐 黄土具に褐を加ふ

○紫土褐 紫土に粉を加へぬり後に藤黄をかくる、又ハ紫土藤黄澱合てもよし、又ハ紫土墨藤黄合す

○墨具褐 墨具ぬりて藤黄かくる

○黄膠 キニカワ 合黄土に膠を多く入たる也

○丁子 丁子をせんしつかふへし、色佳ハ泥の如し

○煤色 ス、イロ 生ゑんしに墨合す

○金銀泥消法并彩法

金箔を皿に入膠水ヲ入、火上に置指にて数百遍するへし、よく抹したる後沸湯を入膠をはなし貯置へし、銀泥同し、又乳金乳銀とも云、合せて二泥と云○金泥をぬるには下に黄膠をぬる、又褐をぬるもよし、或ハ合黄土、丁子の汁に米少加ぬるもよし、泥はすへて周を少退塗にすへし、銀泥の下には胡粉を彫塗にすへし

○黄明膠 スキニカワ

随分よく透通りたる膠を冬月器に入、上に雪を厚く積、数日経て雪自ら消て水に成時、膠ほとひて和に成たるを干て貯置へし、是を晒膠といふ、画具に用て妙也、常の膠は灰汁あるゆへ直に用れハ胡粉などの色別して悪し 画具を和には（以下欠）

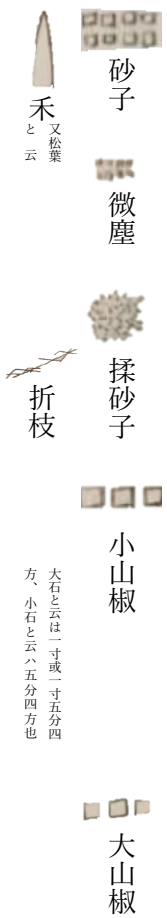
○餌煉 ダンゴネリ

凡絵具を和にたんこねりと云事有、膠入さる前にとくと乾研して後に膠を入へし、しかれとも緑青朱のたくひは久しく研へからず、胡粉黄土のたくひよくくするへし、初より膠を入れハねはりて細になりかたし、膠入て後も又々研へし、乳木は青石の滑なるをよしとす、又ハ木楽子も佳

○彩色詞

塗とハ一面にぬる事也○あびせるとハ一面にあひせぬる也、是ハ水面具に用ゆるか○かくるとハぬりたる上へ又ぬる事也、同画面具にても他具にても同じ○はねこむとは所々村々にぬると也○きほひとは浅中は深処あるを云、きほひ曲とハ深浅くま取也○匂とはきほひの軽もの也○取消とはくまとりけす事也○星とは筆頭にてつく事也○書人とはたとへハ墨にて書たる間へ他具にて書人事也、何にても同じ○深淺濃淡

○切箔之図 切ヤウ蒔様別伝



面に砂子蒔事は雲霞砂石の代りに用れとも妄に用へからず、口伝重々あり

彩色

○人体

凡人の体曲^{クマ}どる事は其形を円く見せしめんがためなり、皮膚^{ヒフ}を塗を面具と云、胡粉に朱と藤黄を入、老人ハ藤黄を多し壮年ハ粉と朱をます、朱のきめにて曲どる、括^{サウ}同じ、或ハ朱墨を用^ニ、美女ハ粉をぬり生ゑんし水の如く浅^{ウス}くして曲どりゑんしにて括、小児は

粉に丹かゑんし少加へて塗、面に曲取所は鼻の旁耳ワキの前ヘヘサガリ 耳の内喉ノドの下瞼の上下
吻クチワキ 顙アタマなど高低見合肝要也、髪は墨ノ具、深墨ぬり所々曲どり、毛書余りに光り過たる
はいやし、発際ハヘギハもあまりにきハだつべからず、白髪ハ浅墨にて毛書、粉浅曲深書入○月
代、浅葱ギ白色僧の頭浅墨上にアヒラウ 灑シラかくる○鬚ヒゲ、浅墨くま墨毛書○美女之面には吾家之定
法あり、鼻ほそく上瞼ウハマツタハかまぼこなりに後窄ボツにし、下瞼は平直にし、口は鼻の半より耳
の方へよせて甚小さく、鼻と口との間も遠く書へし○眉マユ、官女などの作り眉ハ胡麻の油
を紙燭ツケに貼ヤキセて陶類に烟を付て干たる筆を以て浅々とつけ周を掃消へし○口脣の周り
に朱をつけ中を村々に取消し、又左右のクナハキ 咀クナハキに墨一点書入是口伝也、咽クナハキたるは口中村々
朱取消し舌の先より朱くま齒胡粉○眼、貴戚ハ背上りて長く醜眼シウガンは上瞼に廉カドあり、白眼
外に出すべて上瞼は深量にて太下瞼は浅墨にて細書へし○睛ヒトメ、烏珠を浅墨にて書、又中
墨にて周を書其真中に深墨にて睛を入行草には只深墨一点して置へし、よく丸くすれば
賤し、白眼は薄胡粉醜眼には朱又金を入事あり、入様口授多し、貴戚は睛上下に蔵す、
怪形は上に付、柔眼ハ下に付、見入コメたるハ目頭によす、左へ睨ニラミたるハ左大きく右小さく右
へ睨ニラミたるは右大きく左小さく点すへし、画法の秘事と云は睛の一点に在、気形に精神之入
と云は皆眼の一点に在、是を伝神といふ、好て丸くすれハ眼死す、麁なれハ悪し、唯己
か精神にあるのミ、容易不レ伝レ他

○山岩

山石の類は其形定れる事なくして又定れる法あり、猥りにハ描へからず、所フヘキ謂大斧劈小
斧劈長斧劈雨点皴麻皮皴等也、図を見て考知べし、あまりにしたるく塗へからず、尤草真
草にハよるへし、口伝緑青紺青蒼緑等交用ゆ、墨画は深浅あるへし、苔は中緑青ぬり周
白緑にて星、遠山ハ澱にて眉の如く描、所謂遠淡近濃なり、又岫ハゲヤマ 岬ハゲヤマに依て変あり

○水

流水波濤ともに描かたきもの也、深く心を可用、筆頭にて閑々と書はあし、まして巴水などの如きものハ筆頭にて書時は屹屈々と廉立て木理モクメの如くなるもの也、いかにも筆を直にたてゝ身に随て引まハすへし、ずいぶん水筋正しく念入て書へし、麁略なれハ落髪を散したる如くなる也、しかれとも又定規にて引たる様なるは悪し、波文猶以猫かたし、筆続に書へからず、飛泉瀑布などの如くたてなるものハすそ開たるか上円からさるハ水勢弱し、浅水猶以工拙忽見安し、能々念入れは死す、麁なれは悪し、水は草に書とも源流なきハ悪し、淵の地引はすし曲、深浅村々きほひ星様口伝、極彩色は大青ぬり銀泥にて波文を描、行にハ粉にて書へし、池水には緑青にてぬるへし、常にハ澱をうすくさつと引へし、水の深ハ甚下し、又浅彩中彩には筋書なきもよし、草筆に粉を用れハ重くして俗也、真かにたる画にハ粉ヲ入れは鮮引起して佳、池水流水も澱ウネリことに澱の曲取たるハ卑し、画の本と見ゆる処に深付て惣体村々に箒棄たるかよし、尤真草に依へし、深過れハ下し、浅過れハべらす、氣の脱ぬ様にすへし、絹には裏より澱引波文も裏より粉ぬり表より水筋書、尤薄紙にもよし

○波濤 雌雄荒濤 大洋奇峯

海中の潮さし引あり、さし上る時に風吹送れハ懸浪とて波の上を覆懸る波あり、是を濤といふ、又落汐ヒキンホの時落行先より風烈しく吹時は大に浪をあくか敷、これを奇峯といふ、汐の時は必風あるゆへ波濤ことに荒し、又池水の波青海の波飛泉下の白浪等皆それ〳〵の勢あり、図に委し

○遠水

波文も洴も猫へからず、唯皴の如く水筋を描、それも多く書へからず、村々に書へし、彩色も浅かよし、所謂遠水に藍を揉とハ是也

○竹木

竹を描に体用あり、カケヒナタ 阴阳、清淡、錯節、高低、右幹、左幹、細分、カラ 鵲爪、エタ 个葉、聚散、稚子、ヒトツバ 秃梢、ハナキ 高飛、孤燕、二蚕、ケイタン 觚首、センク 四競旦、尖々、平尖、大段、小段等、右ハ写す訣也、又十則十八楷廿四忌廿八病等あり、図に詳也

彩色真は緑青ぬり草汁わり曲尤阴阳あるへし、節下ハ深曲取へし、行草ハ草汁又ハ墨書入付立也、葉緑青草汁わり曲行草ハ草汁墨書入、死葉周合黄土曲、シ 簾竹籜黄土具、朱墨浅くして括、其外常の如し、呉竹緑上の上草汁にて節の上退曲、上浅下深く左深くハ右浅く阴阳あるへし、葉異事なし○焼刃笹葉周黄土具中緑青蒼緑わり曲筍真竹ハ黄土具上に朱墨曲、臙墨にて星尾臙曲ハ竹黄土具朱墨括曲

墨画の竹はまつ刷子を水にて和墨を半分付てよし、左深ハ右浅、右深ハ左浅く、阴阳有へし、葉は个葉を宗とす、本深末浅節毎に枝を出すへからず、枝ことに葉を付る事なかれ、必傍生あるへし、風前風後阴阳表裏雨露霜雪等重々口伝

木の幹枝升降向背描かたし、矩を表裏に当へし、図にくわし、重々口伝松柏梅桃桜楓柳等それくの皮膚あり、又四時の変、生死の体、口授にあらされハ伝かたし

○下草

すへて下葉を描ハ画のべため也、薄か根笹か麦門冬などを書也、本画の真草にはよるといへともあまりに念入たるたるは不可、草汁墨にて書入枯草合黄土朱墨交草も右同意也

○苔

樹や岩などに苔を書事大切也、多ハ甚下し、少ハべらす、見合セ肝要也、真の苔は地緑青周白緑か粉にて、星乱たるはしまらず、繕へハ賤し、行草にハ墨と蒼緑にて唯にて星へし、錢座に及はす、地引に星も同し、少し未干の内に星へし、星様口伝

○正誤

和漢名画師の描たるにも其誤なきにしもあらず誤あるハ画の病也、その宜をハ採用トリひそのあやまりをば改へし、たとへハ山水の景地も悉其地に不ズ跋イタラして描、人倫も古人ハ見事あたはず、其外鳥獸草木も咸コトク見事あたはざれば誤なしとは云べからず、今其一二を左に弁ず、他も推して知べし

○漢呉道子ハ晋以来の名画にして、龍を画時は雲檐軒エンに來り、舞虎を描時は風席上に生ずと、如此名画といへども子路か像を描たるに木劍ノキバを載たり、木劍ハ晋の代に始りての代を去事数千歳の後也、又閻令公か昭君を描たるに帷帽イバウを被カフしむ、帷帽は宋朝に初りての代を去事数百年の後也

○古者狩野元信飛鳥を画たるに頭足共に展ノビたり、すべて鳥飛時首を展れば足縮、足を展れハ首を縮、首足共にのふる事なし、元信是を不知して描たるならん、又群鶴を描たるに雛鶴カキの未玄色なる羽帶たるか地に在て自ものついはむ所を描たり、誤と云へし、玄色なる羽拔ざるうちは親鶴蔓カツラをもて足を係置ツナキものなれば飛事を得ず、白羽生じて後巢立ものなれば玄色なる羽あるうちは地上に描べからず、元信是を知らるにや、誤れりといふへし

地上に栖鳥スシハ後指上短シ、木二柄、栖鳥ハ下テ長シ画師多これを誤ル改へし

○狩野正信か画たるにいまた巢に居燕子之大燕ホの哺する画に燕子ノ尾兩尖を画たり、誤

れりと云へし、燕子巢を離ヘナルといへとも暫は両尖を生せず

○狩野州信か画たるに子規鳥之背を見る所を画たり、子規常に高飛す、何そ背を見るへき、誤と云へし

○子規鳥郭公啄木鳥虫喰等之足指前後各二本ツ、也、是等を前指三本書たるあり、誤といふへし

○麒麟鳳凰ハ世に常に在るものなりねは、誰其形を見て写したると云事もなければ、今描所真に似たるや否を不知

○鷹には別伝あり、猥りに描時は真にあらずよく知れる人に尋知へし、故に今爰に不論

○畜獸角あるものは齒なし、又二蹄或三蹄也

○諸鳥翅ツバサ右左を掩者雄、左右を掩者雌、故雌雄知かたきものは是に因て弁ず

○諸鳥獸を画に広バ広ヘマ所に描くとも、生より大きに描へからず、狩野家にハ生より大きく描事あり、誤といふへし

人物及花鳥に至まで唐土之産物は唐筆に随へし、狩野家ニハ唐筆も用ゆといへとも唐物を描たるに其誤甚多し、獅子に牡丹を描たるに多くは和の牡丹を用ゆ、誤れりと云へし、獅子ハ西域之獸にて唐土にさへなく見し人もなければ彩色も慥ならず、又和の牡丹を用る事大に誤といふへし、唐の牡丹にても用ハ可也共云へきか、或ハ桜に秦吉了、鸚鵡、音呼のたくひを描きたるも誤れりと云へし、すへて唐鳥に和之草木和鳥に唐の草木など堅く描へからず

○古戦之図に胄下地の髪を鬢髪ばかり残したるあり、誤といふへし、月代は室町家より初たる事也

○公卿文官塗弓持たる図多し、塗弓ハ正月十七日大射の時のみと聞し

○菅公之図之論

世に菅公之像を画たるに或ハ自画之写なりと云、又ハ自画也など云に皆黒キ袍之縫掖に浮線綾か雲立涌ワキのもやう也、或ハもやうはかはるとも黒キ袍ならざるハなし、我先祖の書たるも皆黒袍なり、しかるに三代経光故有て菅公之孫文時之筆なる像を見し事ありしが縹袍に闕掖也、太刀も螺鈿にて平帯も仕なり、尤文時も菅公を物したる事ハあるべからざれども、その事跡をバ知たまふべければ是ぞ実之装束ならんとて経光よりして菅公之像を改描て縹袍に書しが、経光か筆ハ世に三枚ならてはなしと也、光国光高二代ハ此義をしらず、古画師之筆跡にまかせて皆黒袍に書し也、実に知又菅公之時代ハ黒キ袍ハツルバミ椽とて喪礼之服也、常にハ着する事なし、百官之服定れもといへとも大中納言より上ツかたは皆縹袍也、其後段々製かはりて唐服を略し用ひ、八十四代順徳帝之時建暦年中に初めて百官之服色を改め大中納言ハ黒袍となりき、後人それを見誤り大中納言よりハ黒キ袍こそ宜しからめとて、古の菅公にまで後代之黒袍を着せしめけると見へたり、彼是を通し考るに黒袍之菅公之像は大審サカ之油師に下りたまひし時二も合す、皆後人之偽筆也、事明に知へし、北野之像も黒袍なれば是もうたかひ有に近し、三度まで焼亡し尊像も焼失なれハ後人之偽作ならんも知へからず、其装束も弁すへからず、自画之像などいへとも黒袍之着したまひしは信すへからず、菅公何ぞ筆したまはんや、かの文時之筆なるハ高辻之家蔵にて容易に見るへからず、文時も菅公薨後に生れたまへハ実の面体はうつゝさる事もあるへし、其外時平、行本、高規、淳茂、佐理、道風などもすへて菅公の時代前後の人々に黒キ袍着たる画多し、皆信すへからず、巨勢金岡ハ菅公と同時之画師なればもし金岡か筆したるあらは是そ真之像ならん尋て求むへし、又渡唐の像ハ唐の王維か画たる像、応永年中に本朝に来りしとあれハ是は漢画に似せて描へし、光高是を得たる事ありて其俣に写し王維が筆は高辻之家に蔵、是即秘書監之服也

○小町の絵に袴のすそ出したる有宜しからず小町はかりははかまのすそをかくすかよし

○源廷尉の像に品々あり、今経光が描たるを以て佳也とすへし

武例高松之図ヲ知牛若丸之図ハ何れか是なるをしらす、

古代之武将ハ武将丹青囊に委しく書ぬれは今爰に記さす

○仏像ハ我家に定法なし爰に省く

すへて古人を描たるには其誤甚多し、しかれども我家にハ力て其誤を正す、よく弁知へし、若一ツも誤ある時はたとひ上工の上品たりとも画の病なり、よく／＼考知へし、故に習学を先務とす、習ある者は下工といへとも其習見るゝ事、習なき者ハ老巧といへとも必疎謬あり、是^常に深く心を留メ山川草木人倫鳥獸までも其形状を知されは或ハ真に写らさる事あり、狩野家には我家之法を立といへとも和漢の画法を知さると見へたり、唯和漢の画法を混雜して用る時は万物皆正真と乖事多し、狩野家には今頗漢画を用ゆといへとも又漢画にあらず、況や和画に於をや 我朝古代の名将或ハ公卿官女等には品々の伝法あり、狩野家には其法不伝と見へたり、唯筆力の逞を本として真不真を不弁、古代の狩野友清或ハ元信などの書たるには成ほど漢画に等事ありしか中古の比よりして形状を失ひ随意的画法となり、只草筆を第一として正真を不弁可悲の至也、生に不似して宜と云とハ又別事也、画ハ本物之実形を取りて描ものなれハ、不似内に似たる気味有へし、漢画ハ成ほどそれ／＼の正真に似て不^{イヤシカラ}下、和画にハ正真に似たると思へは又下^{イヤ}しき所あり、彩色も狩野家には麁末なる事まゝあり、本行草には左も有へけれども真かゝりたるには彩色に口伝多し、是本画具製を不知故か、予か家にハまつ真筆を宗として行草を次とす、草筆のミ好ぬれハ皆実を失ふ、狩野家にハまつ草筆を宗とす、尤筆力の強所ハ及へからず、一得あれハ一失あり

○中古より西川鳥井といふ者あり、是予か家之派^ハを汲損、只物々の真に似る様にとのミ

思ひ余りに密細に書しまゝ終に其体甚下しくなりぬ、是画法之伝を得ずして只画美しき様にとおもひ、自己に書たれハ筆力もなく只風流の妓女歌舞妓などをミ書、素人小児の目を喜しめ却て其真を失ふゆへ町絵師或ハ浮世画師之名あり、彩色も画具の法を不知ゆへ只ぬりたるはかり也、其外鳥獸草木を画たるも筆力なく又真にも似す、甚蓮く下して取にたらず、尤誤も多し、心あらん人ハ賞へきものにあらず、見るにしたかひ見劣するもの也、是等之者或は土佐か伝を得たり、なんとゝ鳴は実に予家の汚名なり

○鳥羽絵と云者は昔鳥羽僧正覚献常に戯面を好て書出したると也、人の形手足瘦て長し、是人の日に向ひたる影を写したると也、是又一流にして画師之取扱ものにあらず、覚献ハ源道済之孫能賢之子也、法輪院に居、鳥羽之僧正と称す

右画法大伝一卷者我家伝来之秘法也恐舐他耳而不成卷帙只以口授然亦後世患有違乖今授禿毫勒为一卷蔵諸家敢而投他掌

元禄三庚午秋七月書于省吾齋

右之一書者土佐流之秘本而希世予之家公有故而得之走筆灯下又有烏焉馬之誤故予改正之

宝暦元辛未仲冬

撻懶堂岩齋白蔵

文政五年壬午春二月得於土井氏所蔵写之

内田邦之蔵